

県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書

ダヤ前遺跡

匹見町埋蔵文化財調査報告第19集

平成8年3月

島根県匹見町教育委員会

県営園場整備事業に伴う発掘調査報告書

ダヤ前遺跡

匹見町埋蔵文化財調査報告第19集

平成8年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成6年に行った道川地区県営圃場整備事業に伴う、ダヤ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　島根県教育委員会文化課

島根大学法文学部教授　中田義昭

山口大学人文学部教授　中村友博

広島大学文学部助教授　河瀬正利

事務局　匹見町教育委員会教育長　斎藤惟人

匹見町教育委員会次長　渡辺隆

匹見町教育委員会教育主事　河野敏幸

調査員　匹見町教育委員会文化財保護専門員　渡辺友千代

調査補助員　和田詩子

調査参加者　栗田定　森脇雅夫　渡辺照　岡本弘

渡辺勉　長谷川時子　山崎リマヨ　溝田久子

大谷孝子　清寺智恵子　塩迫富美枝

3. 発掘調査に際しては、益田農林振興センターをはじめ、島根県教育委員会文化課に終始多人な協力をいただくとともに、山口大学人文学部の中村友博教授からも一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また発掘現場においては、所有者の清寺良嗣氏、そして圃場整備事業の推進委員長である河野裕氏にはご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴状遺構—P、土坑 SKと略号している。なお現物あるいは編集などで使用した現地地図は、匹見土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、まは位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

編集にあたっては、栗田美文・中井将胤・大賀幸恵・大谷真弓氏らが携わり、渡辺隆・渡辺友千代（章末に記す）が執筆し、編集は渡辺友千代が行った。

目 次

| | | |
|------------------|---------|----|
| 第1章 発掘調査に至る経緯と経過 | (渡辺 隆) | 1 |
| 第2章 遺跡位置と環境 | | 2 |
| 第1節 遺跡位置 | | 2 |
| 第2節 地域環境 | | 2 |
| 第3章 調査の概要 | (渡辺友千代) | 7 |
| 第1節 遺跡の地形的立地 | | 7 |
| 第2節 調査区の設定 | | 7 |
| 第3節 層序と層位 | | 8 |
| 第4節 遺構 | | 13 |
| 第5節 遺構と遺物 | | 16 |
| 第4章 出土遺物 | (渡辺友千代) | 21 |
| 第1節 はじめに | | 21 |
| 第2節 図掲の出土遺物 | | 21 |
| 第3節 出土遺物の概説 | | 24 |
| 第5章 小 結 | (渡辺友千代) | 26 |

挿図・図表目次

| | |
|------------------|-------|
| 第1図 遺跡位置図(1) | 2 |
| 第2図 遺跡位置図(2) | 3 |
| 第3図 遺跡配置図 | 5～6 |
| 第4図 土層図 | 9 |
| 第5図 遺構指示図 | 11～12 |
| 第6図 SK03土坑断面図 | 14 |
| 第7図 SK14土坑断面図 | 14 |
| 第8図 SK16土坑断面図 | 15 |
| 第9図 SK19土坑断面図 | 16 |
| 第10図 遺構図 | 17～18 |
| 第11図 遺物出土位置図(平面) | 19～20 |
| 第12図 実測土器図 | 22 |
| 第13図 実測石器図 | 24 |
| 第1表 遺構計測表 | 15 |
| 第2表 土器観察表 | 21 |
| 第3表 石器・炭化物観察表 | 23 |

図版目次

| | |
|-----------------------|-------------------|
| 図版1 1. 遺跡鳥瞰 | 2. 遺跡遠望(南西から) |
| 図版2 1. 発掘風景(A調査区) | 2. 発掘風景(B調査区) |
| 図版3 1. 石器出土状況 | 2. 上器片出土状況 |
| 図版4 1. SK12検出状況(西から) | 2. SK14検出状況(西から) |
| 図版5 1. SK16検出状況(西から) | 2. SK19検出状況(北西から) |
| 図版6 1. SK19陥入状況(西から) | 2. SK23検出状況(北西から) |
| 図版7 1. SK24検出状況(北西から) | 2. B調査区完掘状況(南から) |
| 図版8 1. 出土土器 | 2. 出土石器 |

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鳥根県美濃郡匹見町大字道川の下道川地区におけるもので、該当地を平成5年度に実施した詳細分布調査で明らかになったことによって発生したものである。^(注1)

その詳細分布調査は、該当地の県営圃場整備事業に先立って行われ、そのおり4地点を選定して実施したものであった。それは前田中・ダヤ前・フケ上・判兵衛屋敷の各地点で、うち前田中・ダヤ前の2地点においては遺跡である、ということが確認されたのである。そこで前者の前田中遺跡周辺においては、同年度の9月には圃場整備を始業したい旨であったため、同年7月18日から9月10日まで現地調査を行ない（しかし追加調査が必要であったため、11月6日から12日まで延長）、そして本遺跡のダヤ前は翌年度廻しになったのである。

まず現地調査に先立ち、平成6年7月に地権者と交渉して発掘の承諾を得、同年8月18日には文化庁宛に埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。そして現地調査は同年の9月21日から実施し、11月7～8日の両日には山口大学の中村友博教授などの調査指導を得、調査は同年の12月2日に終えたのである。

（渡辺 隆）

（注1）匹見町教育委員会『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ』平成6年3月

（注2）匹見町教育委員会『前田中遺跡』平成7年3月



発掘風景（B区）

第2章 遺跡位置と環境

第1節 遺 跡 位 置

本報告する発掘調査地は、字名をダヤ前と称し、鳥根県美濃郡匹見町大字道川口275番地ほかに所在する。

その所在する匹見町は、県の南西端に位置し、南東側に標高1000m内外の中国背梁山地が連なって山地を境として南東は広島県、南西の一部は山口県と接している。また町の面積は300.88km²あって、そのうちの96.2%は林野で占められている（第1図）。

町域のほぼ中央部を流れる匹見川は、中国背梁山地に源を発し、北東から南西に走る断層谷に沿い各支流を集め、中流域

では北西へ流下している。

それらの流域には狭長な河

岸段丘が形成されており、

段丘面の平地に僅かな耕地・

民家が点在しているのであ

る。そういった立地にある

本遺跡は、匹見川の上流域

の左岸にあって、標高約

431.86mの水田に位置する

（第2図）。



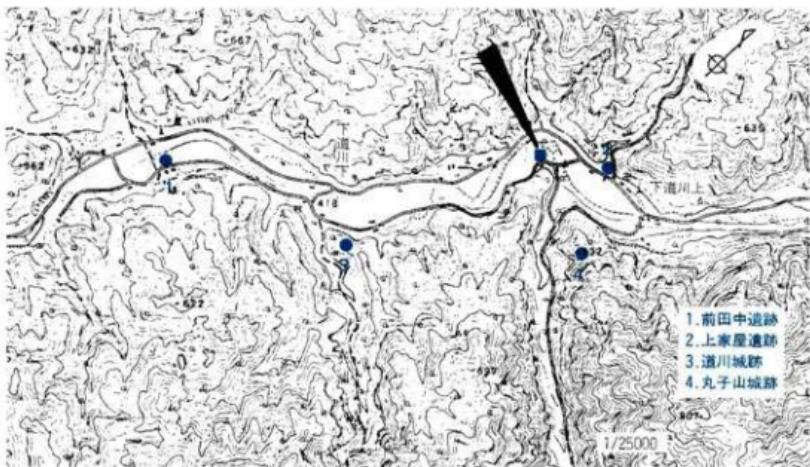
第1図 遺跡位置図(1)

第2節 地 域 環 境

本遺跡が所在する道川地区は、匹見町の北東端に位置し、南東側には高岳（1,054m）・岩倉山（1,022m）・広見山（1,186m）などの高峻な山岳が北東から南西に走り、その山地に沿って並走する数条の地質構造線（断層谷）が発達している。それらの断層谷に沿って河谷を集めた匹見川は、狭長な段丘を形成しながら、本町中央部へ（標高約800～200m）流下しているのである。

そうした山岳立地のため、中国地方でも多雪・最多雨域に属し、年平均気温は13℃と冷涼である。そのような風土が影響して、道川では春の季節が遅れて、花の開花もおそらく、四月の上旬にはコブ

シの花をさきがけとしてサクラ・モモ・ナシなどの花が一時に咲き乱れる。また標高400m～1000mの高低をもつ山林には、温帯林を主体とする落葉広葉樹、例えばクリ・ナラ・ホウ・トチ・ムク・カエデ・シデ・サルスベリなどが豊富に繁茂している。また標高800m以上になると、山頂まで冷温帯林のブナ帯で占められているが、一方、低地の河川沿いにはカシ・ツバキ・サカキなどの照葉樹も混生している。しかし、現在では広葉樹林が破壊されつつあり、人工林としてスギ・ヒノキの植林地がひろがりをみせているのである。



第2図 遺跡位置図(2)

このような樹林帯には、堅果・根茎類などの豊富な植生下にあり、それを主食とする小中動物が数多くみられ、例えばクマ・イノシシ・キツネ・タヌキ・ムジナ・テン・イタチなどの哺乳類や鳥類などはしかりである。また河谷には、鮭鱒科のゴギ・ヤマメといった冷水の魚類も生息している。このような動物たちが生態系を維持してきた背景には、落葉広葉樹が広がり、いまだにその豊かな自然が残されているからとえられる。

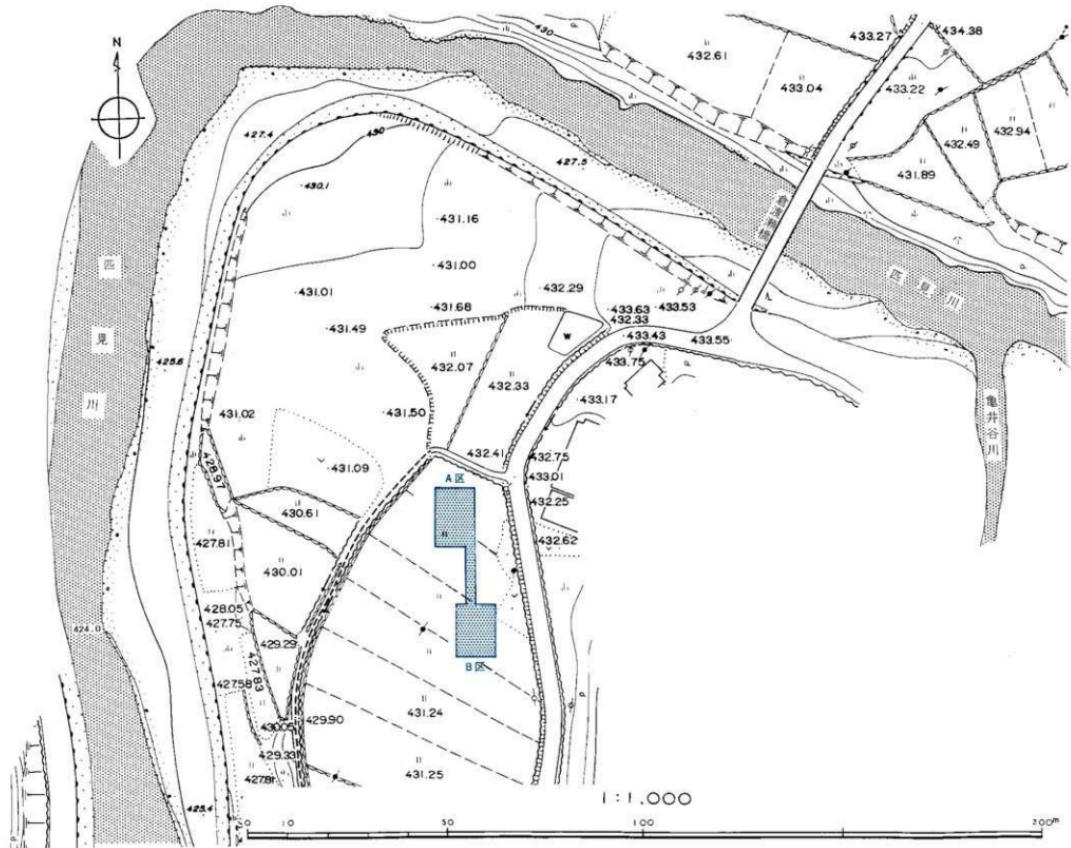
こうした広大な山林が周囲する本地区の生業は、旧くから農林業を中心として営まれてきた。とくに藩制期には、盛んであったタタラ技術が藤井氏によって搬入され、製鉄用炭材林として最大限に活用されたのである。そういったタタラ跡は、谷の出合いに比較的多く分布しており、現在37ヶ所が確認されている。それは、本町においての50%に達しており、本地区において盛んであったことを裏付けている。また、コウゾ・ミツマタを原料とした製紙業や木地師による各種の木地品が生産され、木炭、木材生産なども盛んにおこなわれてきた。その後も製炭は、明治・大正・昭和時代

とひき締められたが、昭和32年をピークとして、燃料革命と産業構造の変化により衰退し、現在では、需要の高いシイタケ・ワサビなどの環境に適した栽培などに活路をみいだしている。そのように旧来から豊富な山林資源に支えられた生活が行われてきたのである。

そうした山間地にある本地圏の原始古代遺跡は、目がむけられなかつたためか顯著ではない。しかし本遺跡の上流部にあたる匹見川と赤谷川の相会地には、県史跡である先土器から縄文前期を包含する新横原遺跡があり、その対岸約100mにも集石炉・配石墓（先土器～縄文時代前期）が確認された田中ノ尻遺跡が分布している。また下流域の下道川においては、町指定の縄文時代後期の上家屋遺跡や墓石遺構が検出された前田中遺跡があつて、その南東側を北東に伸びる丘陵地の山上には、中世期の山城である道川城跡・小丸山城跡などが存在しているのである（第2図）。

以上のように本地区にも、古くからの各時代の歴史がみられ、今後、圃場整備事業に伴なつて分布調査が行われれば、さらに遺跡も増し歴史も解き明されるであろう。

（渡辺 友千代）



第3図 遺跡配置図

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の地形的立地

本遺跡の北西側80mには、匹見川が比高差約6mを測って北東から南西流し、それに沿って狭長な河岸段丘がつづいているが、北西—南東方向は急峻な山地がせまっている（第2図・図版1-1）。また西側100m地点には、北西流する谷川である亀井谷川が匹見川に相会していて、本遺跡周辺は河は蛇行し、舌状に周流しているとともに、そこは比較的平地が形成されている。こうした河岸段丘に立地する本遺跡周辺は、河を挟んだ両端の山裾側には県道・町道の2線が並走していて、段丘が発達する左岸域は水田が広がっているという立地に存在している。

本遺跡は、その舌状に形成された水田が広がる東端の山裾側にあり、標高431.1m～431.9mであって、その高低差約80cmを測る地点位置にある。

第2節 調査区の設定

調査区は、平成5年度に実施した詳細分布の調査区を基準に設定することにした。⁽¹⁾つまり、磁北方向に10m測って設定されていた東辺に併するように設けることにしたのである。

まず、その該辺を基準にして15mを測ることから始めた。そしてその北端から河側である東に向って10m測り、逆L字形に計測した。また対角は、同様な計測方法でL字形に測って前者のものと結び、つまり10m×15mの長方形区を設定したのである（第3図）。これをA区と称することにして、その調査区の磁北方向の中心部に幅50cmを測るベルトを設けた（第3図・図版2-1）。しかしA調査区を掘削した結果、同区においては文化層としての層序は認められなかったため、後には別設することにしたのである。

その別設したものは、A区から南側15m測った地点に設けることにした。それは磁北方向に13m、東・西方向に10mを測る調査区とした。この調査区を北側のA区に対して、B区と称することにしたのである（第3図・図版2-2）。本区も大区画であったため、層序の観察のためのベルト（幅50cm）を中心部に十文字形に設けることにした。なお、本区のⅣ層黒色有機質土から遺物包含層が確認されたため、A区からB区の間に幅2mを測るトレンチ（本トレンチと称すもの）を掘削の中途において設けた。これはA区とB区との層序状況の関連性を探るためにものであった。したがって発掘面積は、最終的には310m²となったのである。

第3節 層序と層位

1. A区

A区の基本層序は、Ⅰ層の水田耕作土、Ⅱ層の客土（小礫を含む）、Ⅲ層の酸化鉄円礫層（茶褐色）、Ⅳ層の橙褐色粘質砂質土（円礫を含む）、Ⅴ層の灰色円礫層、Ⅵ層の灰色砂土の順で堆積している（第4図・図版2-1）。

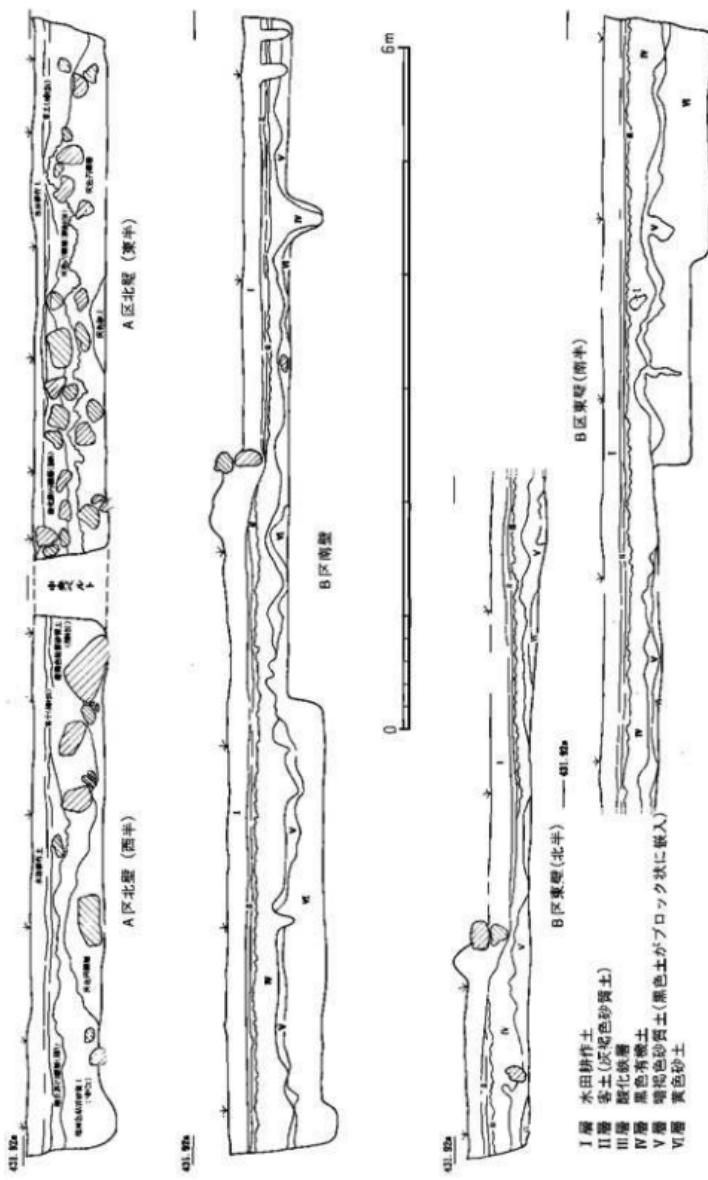
Ⅰ層の水田耕作土は、粘質おびた暗褐色土である。層厚12~18cmを測り、中央ベルトに向かって右上がりに薄くなっている。中央ベルトより東側は比較的水平に堆積していた。Ⅱ層は客土で3~4cmの小礫を多く含んでいる。層厚は中央ベルトより西側で約8cm測り水平に堆積していたが、中央より東側は部分的には尖滅あるいは薄層もみられ、下面の層界は乱下しする。Ⅰ・Ⅱ層とも川上遺物は確認されなかった。

つぎのⅢ層は酸化鉄円礫層（茶褐色）。茶褐色を呈するのは酸化鉄の含浸によるものである。西側では層厚約10cm測って薄く、中央ベルト付近で尖滅していた。しかし、中央付近から東側に向かっては厚い部分で約30cm、薄い部分で5cm測るなど厚薄差のはげしい層位である。また、西側は河原石が小さく、東側は50cm大の河原石が充填していて、堀削作業は困難であった。Ⅳ層は橙褐色粘質砂質土（円礫を含む）。中央ベルトから西側のみに堆積していて、層厚は5~40cmを測り、下面の層界は乱下し、層厚差ははげしくなっている。東側においては、灰色円礫層が層厚約20cmで堆積していた。なお分布調査では、4層の橙褐色粘質砂質土層から数10点の剣片と1点の土器片が検出されている。^(注1)しかし本調査区からは確認されなかった。これは上述してきているように、河床疊の堆積層によっていることにはほかならない。つまり数次における匹見川本流の横溢によると考えられ、流失・或破されたものと想像されるのである。したがって分層することも困難をきわめたのであった。

Ⅴ層は灰色円礫層で、人頭大~1mを越える河原石が堆積していた。層厚は、厚いところで40cmを測るが、部分的に尖滅あるいは薄層もみられ、堆積状況は凹凸する。下面に堀削するほど灰色の砂質になり、河原石もほとんどなくなっていたため、その地点から下面をⅥ層の灰色砂土層と分層した。なおⅤ・Ⅵ層ともいずれも遺物は皆無であった。

以上みてきたように、本調査区の層序は匹見川本流の横溢・貰流によって堆積形成された、とてうことにつきる。直下は河床疊層という状態であったことから、後述のB区でも説明するが、水田開墾時に人为的削平が行われ、上位層（黑色有機質土）が削られたものと考えられる。それはB区における堆積状況からも捉えられるのである。

第4図 土層図



2. B 区

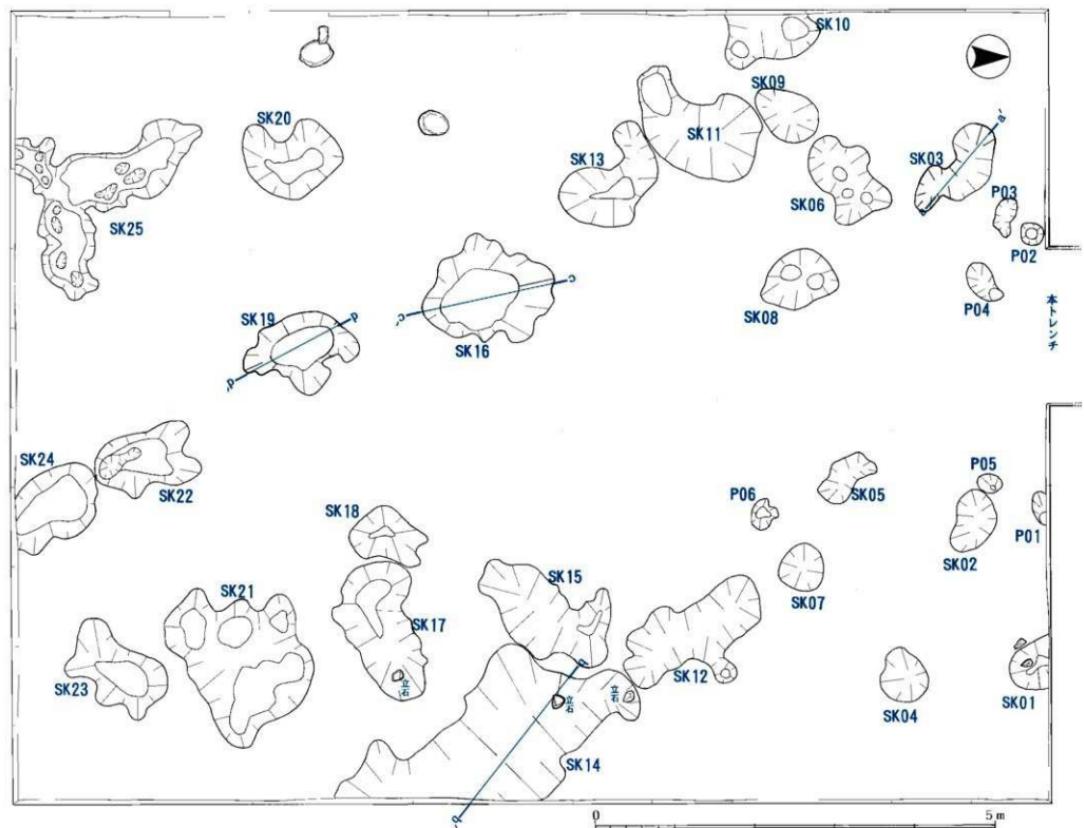
B区の基本層序は、Ⅰ層の水田耕作土、Ⅱ層の客土（灰褐色砂質土）、Ⅲ層の酸化鉄層、Ⅳ層の黒色有機質土、Ⅴ層の暗褐色砂質土（黒色土がブロック状に嵌入）、Ⅵ層の黄色砂土層の順で堆積していた（第4図・図版2-2）。

河岸段丘が形成され、河側（南西側）に向かって段状に低くなっている本調査区は（図版1-2），現地表面標高431.46～431.95mを測り、その差約50cmである。しかし高低差50cmあるが、表土のⅠ層耕作土の層厚には影響なく、全面に約20cm前後を測って堆積する。なお本層は、A区のⅠ層と同様な粘質おびた暗褐色土であった。Ⅱ層は灰褐色砂質性の客土（床土）で、1～2cm大の石粒を多く含んでいる。層厚は約5cmを測って全体的に平均に堆積していた。つぎのⅢ層は酸化鉄層。層厚は3～5cmを測り、バラつきはあるもののほぼ平均的に堆積していた。これらのⅡ・Ⅲ層は、前述したように調査区が段状になっているため、南西側に向かって徐々に低くなり、その差約15cmを測った。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層いずれも出土遺物は皆無であった。

Ⅳ層は黒色有機質土。河原石などの石はほとんど見られない。層厚は10cmから深層部分で30cmを測るが、縦的には南北側が薄層となっていて、おそらくこれは水田作造時に水平的に削平したことによって生じたものと考えられる。なお東壁の一部分に、Ⅰ層の耕作土が嵌入しているが、これはモグラなどの生物痕と判断した。本層からは遺物が出土しておらず、そのほとんどは小片の石器の剝片であって、やはり石器類においても僅少であった。なお、本層においては20～30cm大の河原石が、その中位面の遺構面にパラト的に検出されている。これは本層が自然堆積の有機質土であることから、状況的に自然流入とは異なり、貫流などによってもたらされたものではなく、人為的と捉えられるとともに、そのことから遺物の出土状況などから本層の中位面であったと想定されるのである（遺物・遺構については後節で詳しく述べる）。したがって層界面の遺構跡は、たまたまⅣ層から陥入したものと捉えられるのである（図版4-2）。

Ⅴ層は、暗褐色砂質土で層厚は5～15cmを測る。部分的に尖滅あるいは薄層もみられ、堆積層厚は一様ではなく、層界面は乱上下する。なお、所どころにモグラなどの生物痕が嵌入している。また、部分的にⅣ層下位面からの陥入坑と想定される遺構は多く介在しているが、出土遺物は皆無であった。つぎのⅥ層は、南東側に4m四方を部分的に下位により掘削をおこなった地点に検出された堆積層であり、それは黄色砂土であった。状況的にみて他の掘削していないところも、おそらく同様の黄色砂土であろうと思われた。本層からの出土遺物は皆無であった。

上述したように、本調査区における文化層はⅣ層の黒色有機土であり、生活基盤は同層の中位面



第5図 遺構指示図

にあったと思われる。この層位は安定した堆積状況ではあったが、出土遺物が少ないとや、後節の4・5節で詳しく述べるが、遺物やピットなどの遺構が（第11図）B区の北側に集中していることから、遺跡の中央はA区付近にあって、B区地点は、遺跡の偏端地にあたっていたと想定される。

第4節 遺構

1.はじめに

本節で述べる遺構については、A区では検出されていないので、本報告するものは全て、B区におけるものである。また、これら検出された遺構については、その形状からピット状のものをP、上坑状のものをSKと略号することにしている。（第5図・第10図）。

また、第1表の遺構計測表でいう上面標高というのは、遺構が確認された検出面の標高を差すものであり、傍線記号は実測できなかった不確定なものを表示したものである。

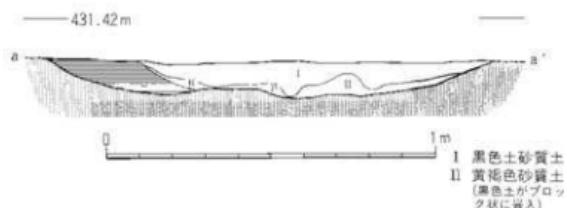
2.ピットと土坑

ピット 柱穴状のものは6穴検出された（第5図・第1表）。これらのピットは径22~56cmを測るもので、P03・P04のように連穴するものがあって、単穴のものは凡そ30cm前後のものであった。検出面はIV層の黒色の有機質土と、地山と想定されるV層の暗褐色砂質土との層界面に確認されており、遺構内にはIV層の黒色土が嵌入していた。また、これらのピットは調査区の北面側に散見されたが、在穴する調査区の周辺を拡張していないということもあって、それらが柱穴なのか、どのような性格のものであったのかについては判断できなかった。しかし遺構面がしっかりしていること、北面側にある程度のまとまりをもっていることなどから、これらが人為であったことは間違いないであろう。

土坑（SK） SKと略号する上坑は、25坑が検出された（第5図・第1表・図版7-2）。これらの上坑は、ピットと称した遺構と同様、IV層黒色有機質土とV層の暗褐色砂質土との層界面に検出されている。また構築層とみられる層位はIV層であったと想定され、そのIV層は表面から35~70cmを測る下位面にあたっている。なお、その層位は標高が高かった北東面側が薄層となっていて、下流方向で河寄りにあたる南西面側が厚層という傾向がみられた（第4図）。

これらのSK遺構は、径幅に比べて全体に浅く、凡そ10~20cm測るものが大半であった。しかし、それは確認することのできたIV層・V層の層界面からのものであったためであり、実際には、意図に配されたものと認識できる坑上の人為の河原石などから、遺構はIV層中位面から下にかけて構築されていたものと想定される。また、具体的には各遺構について後述していくが、焼上に充填し

たものがあったり、人為的と想定される配石状のもの、また径幅で大小の違いもあって、これらのSK遺構には多様がみられるようである（第1表）。

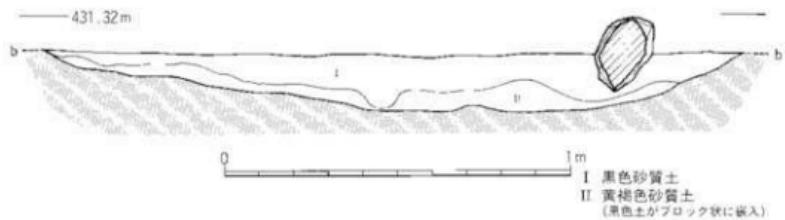


第6図 SK03 土坑断面図

そのうちSK03は、北西面側に検出された長めの不整形の十坑（第5図・第6図）。深さは10.5cmと浅く、壁面は弛緩であった。坑内には上位面を中心Ⅳ層の黒色土が嵌入

していたが、下面には黒色土をブロック状に含んだV層の暗褐色砂質土が搬入する。また本坑には縄文土器片1点（第12図-1）、石器剥片1点、径2～4cmを測る炭化物4点が検出された（第11図）。顯著な炭化物の出土から炉跡であった可能性はあるが、しかし他に焼土など痕跡などが確認できなかったことなどから、どのような性格のものかは判らなかった。

SK14土坑は、東壁際のはば中央部分に検出されたもの（第5図）。土坑幅は約1.3mを測るが、長さについては一部が壁外に隠見されていて判らないが、3mは越えていると思われる。最坑底までの深さは14cmを測って、径幅部に比べてやはり浅く、傾斜度も弛緩である（第7図）。坑内にはⅣ層の黒色土が嵌入し、部分的にモグラ類の生物痕が認められ、その痕跡穴にはV層の暗褐色砂質土上やVI層の黄色砂土が嵌入していた（図版4-2）。また、坑上（遺構検出面）には径15～25cmを測る河原石が5石確認され、そのうち2石は立石状を呈していて（第7図）、それは土坑範囲際にみられた（図版4-2）。これらの河原石が自然的なものであるか否かについては判然としない。しかし、文化包含層として捉えられるV層では他にほとんど石体がみられなかったこと、またSK01やSK17土坑のように、そうした遺構に共伴していることからみて、人為に配設されたものと想定される。なお、本坑からは他に共伴遺物はみられなかった。

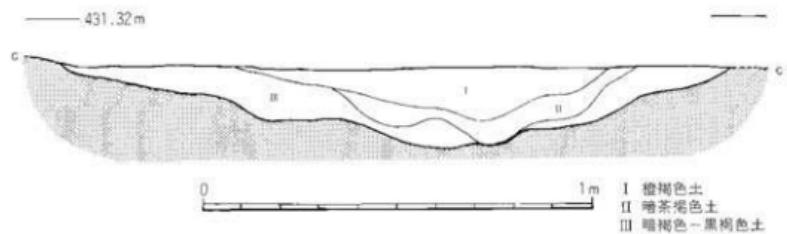


第7図 SK14 土坑断面図

第1表 遺構計測表

| 遺構 | 短径 cm | 長径 cm | 深さ cm | 上面標高 m | 摘要 | 遺構 | 短径 cm | 長径 cm | 深さ cm | 上面標高 m | 摘要 |
|------|----------|----------|----------|-----------|-----------------------------|------|----------|----------|----------|----------------|-----------------------|
| P01 | — | 42.0 | 28.0 | 431.270 | — | SK11 | 86.0 | 180.0 | 22.5 | 431.235 | — |
| P02 | 28.0 | 32.0 | 9.0 | 431.280 | — | SK12 | 60.0 | 196.0 | 11.5 | 431.245 | — |
| P03 | 22.0 | 48.0 | 9.0 | 431.280 | — | SK13 | 50.0 | 132.0 | 21.0 | 431.220 | — |
| P04 | 30.0 | 56.0 | 22.0 | 431.280 | — | SK14 | 132.0 | — | 14.0 | 431.130 | 坑上に5石の配石 (うち2石の立石) |
| P05 | 24.0 | 30.0 | 12.0 | 431.280 | — | SK15 | 54.0 | 190.0 | 15.5 | 431.205 | 土壁(1点) |
| P06 | 28.0 | 40.0 | — | 431.290 | — | SK16 | 96.0 | 170.0 | 19.0 | 431.200 | 燒土・炭化物 |
| SK01 | 70.0 | — | 19.0 | 431.310 | 坑上に2石の配石 | SK17 | 74.0 | 182.0 | 20.5 | 431.175 | 土壁(1点)・坑上に1石の立石 |
| SK02 | 42.0 | 84.0 | 8.5 | 431.275 | 層界に酸化鉄が含浸 | SK18 | 48.0 | 100.0 | 11.5 | 431.165 | — |
| SK03 | 38.0 | 136.0 | 10.5 | 431.285 | 土壁(1点)・石器剝片 (1点)・炭化物(4点) | SK19 | 70.0 | 148.0 | 14.0 | 431.120 | 石器剝片(1点)・ 燒土・炭化物 |
| SK04 | 56.0 | 72.0 | 16.0 | 431.310 | — | SK20 | 72.0 | 126.0 | 16.5 | 431.165 | — |
| SK05 | 34.0 | 74.0 | — | 431.290 | — | SK21 | 130.0 | 240.0 | 14.5 | 431.155 | 縁片(1点) |
| SK06 | 51.0 | 124.0 | 14.0 | 431.270 | 石器剝片(2点)・ 坑底部に生物痕 | SK22 | 61.0 | 136.0 | 18.0 | 431.110 | — |
| SK07 | 56.0 | 60.0 | 12.0 | 431.290 | — | SK23 | 54.0 | 144.0 | 9.5 | 431.125 | — |
| SK08 | 68.0 | 100.0 | 16.5 | 431.245 | — | SK24 | 70.0 | — | 14.0 | 431.110 | — |
| SK09 | 54.0 | 88.0 | 20.0 | 431.260 | — | SK25 | 66.0 | 242.0 | 38.5 | 431.115 | 坑底部に多数の生物 痕 |
| SK10 | — | — | 19.0 | 431.250 | 炭化物(1点) | — | 不明を示す | — | — | 現地表面標高431.620m | — |

調査区のはば中央部に検出されたSK16は、焼跡の著しい土坑(図版5-1)で、短径96cm、長径170cm、深さは19cmを測る(第1表)。その土坑の中央部には、55~180cmを測る径幅に焼色の橙褐色土が最深部で16cmを測って堆積していた(第8図)。また、その橙褐色土の外辺、とくに南半部を中心晴茶褐色の焼上がり、層厚3~8cmを測ってとり疊むように堆積し、一方でそれらの橙褐色・暗茶褐色の焼上中には大小(5~15mm)の炭化物も散見されている。



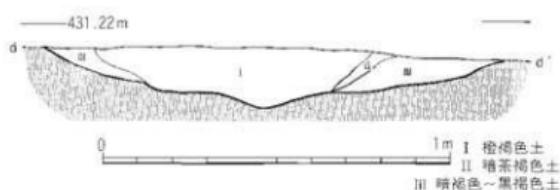
第8図 SK16 土坑断面図

この土坑は埋込まれたらしく、それらの焼上の外周には暗褐色~黒色を呈した陥入土がみられたのである。しかし大部分がⅣ層の陥入土(黒色土)ではあったものの、一部においては斑点状に焼

七、あるいはVI層の黄色砂土もブロック状に嵌入していた。また、十坑の傾斜度は弛緩であるが、坑壁には3段から成る界面がみられた。

SK16十坑の南西側に検出されたSK19土坑（第5図）

は、SK16土坑と同様、焼土のため橙褐色・暗茶褐色を呈する上坑である（図版5-2）。溝幅は70～148cmで、深さは14cmを測った（第1表）不整形のもの。坑面の中央約1/3は橙褐色を呈した燒土となっていて、坑底面から堆積していた（第9図）。また焼化差の成因によると思われる暗茶褐色の燒土は南西側を中心に外押しし、そして、その外辺から坑界にかけては暗褐色～黒色土が嵌入するといった、状況の堆積の仕方であった。とくに燒土中には燃化した炭化物がみられ、またその坑中からは人骨による疊の石塋剖片（第13図-3）が共作している。これらの状況から判断すると、同坑およびSK16土坑は、顯著な堆積した燒土から焼燃のための跡であったことは確実であるが、これが鉢としての機能をもったものか、については断定するだけの資料は確認できなかった。



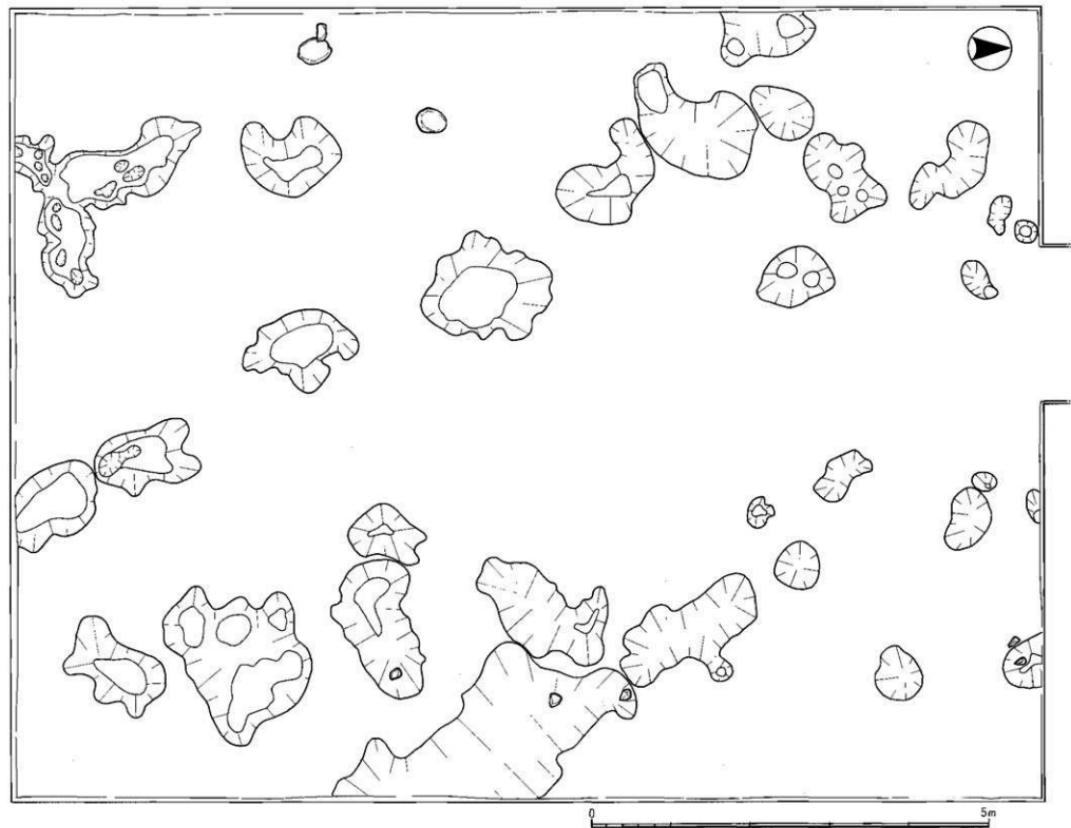
第9図 SK19 土坑断面図

第5節 遺構と遺物

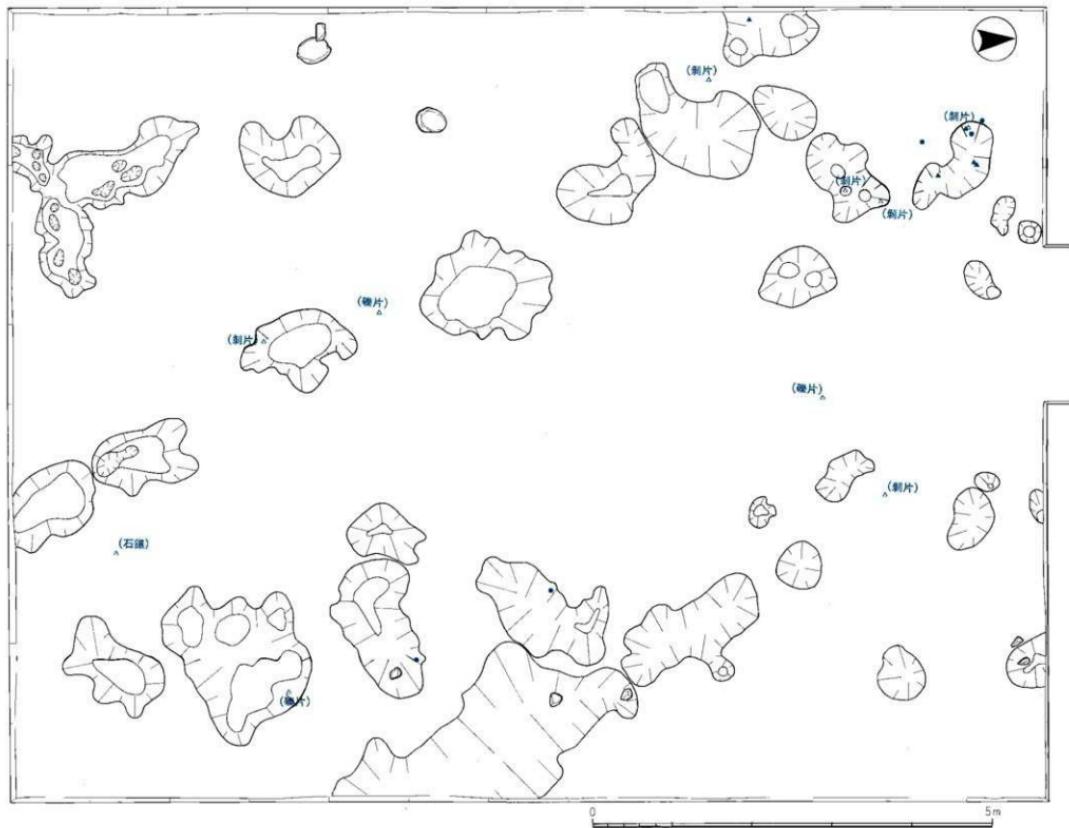
本遺跡から出土した遺物は、上器・石器・炭化物の3種類であった。詳細については、次章でみていくことにするが、時期付けができる上器をみると、まず縄文時代早期末のものと、縄文時代前期中葉以降のものとに別られる。この2つの隙間は、一連的継続していたものかについては、その間を埋めるための資料遺物がないことから、むしろ断続的な複合遺跡だった、として捉えられた方がよいかも知れない。ただ遺物から2期として捉えられたとしても、遺構においては4層という同一層位内での同時性の検出の仕方からでは、数例の遺物と共に作る遺構は別にして、大半は明確に分類することはできなかった。ピットが散見される北側面には、その遺構に呼応するかのように菱根式の土器片が出土している。これは共作したとはいえないが、可能性をもった傾向として捉えることができるであろう。

（渡辺友千代）

(注1) 北見町教育委員会『北見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』平成6年3月



第10図 遺構図



第11図 遺物出土位置図(平面)

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

出土遺物は石器10点、土器6点、炭化物少量の3種類であった。そのうち石器類は、7点の安山岩系の剝片、2点の花崗岩系の礫片と1点の安山岩系の製品としての石鏃とに別られる。また6点の土器片のうち4点は菱模式で、残りの2点は彦崎Z1式と思われる押引文系であった。また、炭化物はSK10上坑で検出されており、とくにSK03・SK16・SK19の上坑では顕著であり、これらは焼化された炭化物だったと思われる。

これらの出土遺物は、すべてⅣ層黒色有機質土の中位面から下位面にかけて検出されたもので、全て平面的位置を押さえるとともに、垂直位置も実測して取り上げたものである。

第2表 土器観察表

| 出土番号 | 土器型式 | 法量 | 色調 | 出土層位など | 摘要 |
|-------|-------|---------------------------------------|---------|----------|---|
| NO.03 | 菱模式 | 径幅2.8~4.5cm 器厚0.6cm 器重8.3g | 橙褐色~茶灰色 | B区 Ⅳ層 | 口縁部 外面一綱文地 内面一条痕地 内面煤付着 燃成良好 |
| NO.07 | 菱模式 | 径幅3.5~4.3cm 器厚0.5~1.0cm 器重11.2g | 橙褐色~茶灰色 | B区 Ⅳ層 | 外一面綱文地 内面一条痕地 器肉は厚薄差あり 内面煤付着 燃成良好 |
| NO.08 | 彦崎Z1 | 径幅1.5~2.0cm 器厚0.4cm 器重1.9g | 黒褐色 | B区 Ⅳ層 | 薄手小片 外面一綱走条痕地・押引文 内面一綱文地調整後ナゼ消し 燃成良好 胎土2~3mmの大石英を含む |
| NO.13 | 彦崎Z1? | 径幅1.3~1.7cm 器厚0.4cm 重さ0.8g | 橙褐色 | B区 Ⅳ層 | 薄手小片 燃成良好 NO.08に類似するものか? |
| NO.14 | 菱模式 | 径幅3.3~3.8cm 器厚0.7~1.2cm 器重9.7g | 橙褐色~茶灰色 | B区 Ⅳ層 | 外一面綱文地 内面一条痕地 織維混入 燃成良好 |
| NO.16 | 菱模式 | 径幅6.5~8.5cm 器厚0.6~0.8cm 器重46.9g | 橙褐色~茶灰色 | B区 Ⅳ層 | 胸部片 外面一綱文地 内面一条痕地 織維混入 内外面煤付着 燃成良好 |

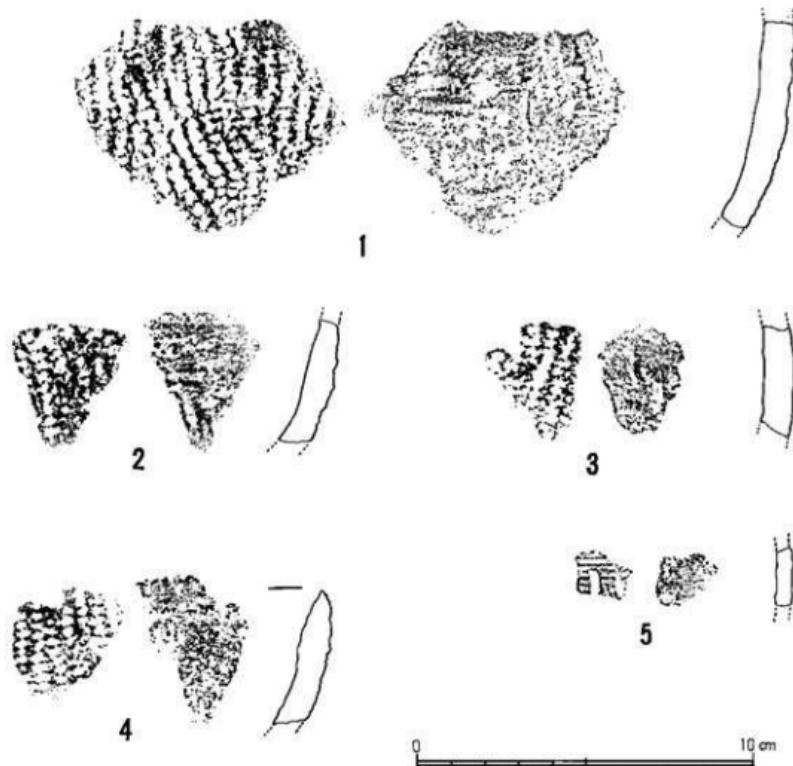
第2節 図掲の出土遺物

1. 実測土器（第12図・図版8-1）

1は脇部片で出土七器では最も大きなもの。外側は単筋の右撲りの綱文施文である。内面は、横走の条痕で調整し、径は6.5cm×8.5cmの横長もの。厚さは0.6~0.8cmを測って比較的厚手で、織維を混入させていたらしく、側面には炭化痕や、その炭化の抜痕跡がみられる。なお内外面とも少量の煤が付着しているが、胎土の色調は橙褐色~茶灰色を呈する。2・3とも1と同様、胸部片である

が、そのうち2は口縁部に近い部位のものと思われる。厚さは0.5~1cmを測り、厚薄差がみられる。3は、厚さ0.7~1.2cmを測り、外面は粗く凹凸する。いずれも外面は単節右撫りのRLである。なお色調は橙褐~茶灰色を呈し、内面の調節は条痕施文で、焼成は良好。また胎土は精緻で纖維が混入されているようである。

4は、厚さは口端部の尖滅部分から、そして、下方破端部は0.6cmを測る口縁片(図版3-2)。口縁端は尖ったように上方に向き、その器壁は碗状に立ち上がる。外面の施文は上述した上器片と同様、2本撫りのRLで、斜走方向の縄文施文である。ただ縄文施文の下地は条痕調整であったものなのか1筋ではあるが、沈線状の横走が確認される。内面は条痕調整とするが、口縁端部は撫で仕上げ。しかし美麗的に映るところをみると、磨きかも知れないが、判らない。また下方にも撫



第12図 実測土器図

でが及んでいるようにも思われる。いずれにしても内面には煤が付着して詳細については判断できない。焼成は良好で、胎土には石粒などは含まれず、精緻である。なお色調は橙褐～茶灰色を呈し、前述の1～3の土器と同じ部位片のものと想定される。5は、径1.5×2 cm、厚さ約0.5 cmを測る薄手の小片である。外面は横走の条痕を施こし、小片で詳細は判らないが、縦方向には並列した押引きふうの押出文がみられる。また内面は条文で調整した後、撫消したようにも見受けられる。焼成はきめて堅緻で、胎土の色調は黒褐色を呈していて、前述した土器とは多面的に異なる。おそらく調整方法・施文や色調などからみて彦崎Z1式に併行するものであろうと考えられる。

第3表 石器・炭化物観察表

| 出土番号 | | 種目 | 法 量 | 出土層位など | 摘要 |
|-------|-------|--|---------------------|--------------------------------------|----|
| NO.01 | 搔 器 | 器長6.3cm 器幅2.9cm 器厚1.5cm 器重19.0g | B区 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 刀部の両縁を細く剝離 | |
| | | 器長1.5cm 器幅1.0cm 器厚0.3cm 器重0.6g | B区 IV層 | 黑色有機質土 | |
| NO.02 | 研 片 | 器長1.6cm 器幅1.0cm 器厚1.5cm 器重19.0g | B区 SK06上坑 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 碎片 | |
| | | 径幅2～3cm | B区 SK06土坑 IV層 | 1点 黑色有機質土 | |
| NO.05 | 炭 化 物 | 器長3.4cm 器幅1.9cm 器厚0.6cm 器重2.5g | B区 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 刀部の片面のみ剝離 一部自然面 | |
| | | 器長5.8cm 器幅2.0cm 器厚1.1cm 器重12.5g | B区 IV層 | 花崗岩 焼石片？ | |
| NO.10 | 石器剝片 | 器長2.9cm 器幅2.0cm 器厚0.6cm 器重3.2g | B区 SK19上坑 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 刀部の片面に丁寧な剝離調整 | |
| | | 器長1.9cm 器幅1.5cm 器厚0.3cm 器重1.0g | B区 SK21上坑 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 | |
| NO.12 | 石 鐵 | 器長3.2cm 器幅1.6cm 器厚0.4cm 器重2.0g | B区 SK03土坑 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 丁寧な剝離調整雁形に類似 | |
| | | 径幅2～3cm | B区 SK03土坑 IV層 | 4点 黑色有機質土 | |
| NO.17 | 石器剝片 | 器長1.5cm 器幅1.1cm 器厚0.2cm 器重0.8g | B区 SK03上坑 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 碎片 | |
| | | 器長1.8cm 器幅1.4cm 器厚0.2cm 器重0.4g | B区 SK06土坑 IV層 | 安山岩質 黑色有機質土 碎片 | |
| NO.18 | 石器剝片 | | | | |

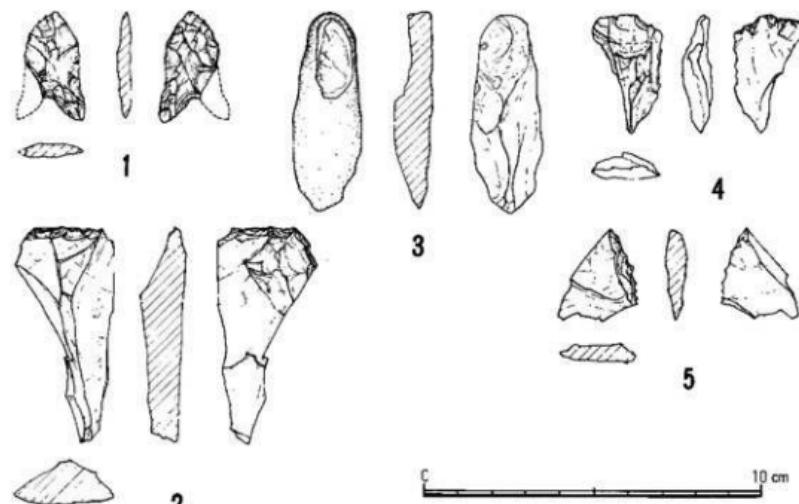
2. 実測石器（第13図・図版8-2）

1は、安山岩質の石錐で、SK22・SK24土坑の東辺に出土（第11図）したもの（図版3-1）。最大長3.2cm、最大幅1.6cmを測り、重さは2 gである。錐の方は「掌」で、平面・側面とも偏形することもなく均齊がとれ、脚部は発達している。俗にいう脚部は雁形に類似している。

2は、器長6.3cm、最大幅2.9cm、厚さ1.5cmを測り、重さ19 gの安山岩質の搔器。図掲でいう最大の加擊面は、左・右・上方からの3面にあって、そのうち刃部は、両縁を細く剝離調整し、斜度は30°を計る。

3は、SK16・SK19上坑の間に出土した砾片と思われるもの。材質は花崗岩系のもので、加擊あるいは打面が弱く明確でないことなどからみて、自然的または焼跡土坑側邊に出土したことから、焼火による損壊痕かも知れない。4は、搔器と想定される安山岩質のもの。最大の加擊は、図掲の背面によるところの上方と左辺の2方にある。上方のものは、打面に自然面みられるが、背・腹面に影響させている加撃である。左辺のものは、加撃が離邊にあったものと思われ、端面にあたり壊痕は弱く、石目に沿って壊損したようである。また右側邊は、背面側に斜邊形の鋭利な弧状の刃部をなしてい、並に2次加工の剝離がみられる。最大長は3.4cm、最大幅1.9cmを測り、重さ2.5gである。

5は、片面に丁寧な剝離調整を施した安山岩質のもの。洋幅は2cm×2.9cmで、厚さ3.2gである。図掲の背面でいう左上面は、単裂な壊れからみて、おそらく損欠面とみられる。また刃部の斜度は、70°あって急斜度の剝離調整である。



第13図 実測石器図

第3節 出土遺物の概説

前節の図掲第12図の1～4は、菱根式といわれるもので、出土位置や、施文調査・色調などから同一個体の部位片と思われる。^(註1)僅少の出土から詳細について捉らえることはできないが、これらの

該当片が同一個体と想定されることからみていくと、つぎのような見解が抽出せないでもないと考えられる。

これらの文様施文は、やや斜向する単節の右燃り（RL）の縄文であること。そして、その下地は腹面もそうであるが、横方向の条痕文で調整されていることなどが、まず捉らえることができるであろう。そして、色調は橙褐色～茶灰色を呈し、胎土には石粒などを含ず、きわめて精緻であり、胎土には纖維が混入されているのである（第12図-1・-3）。また口縁部の傾きは開き気味に立ち上がり、端部は僅かに内面側に弧を成している一方、上部は垂直的である（第12図-4）。

また第12図-5は極めて薄手で、角頭状の施文具による押引文を施したものであった。色調は黒褐色を呈し、胎土には2～3mm大の石英を含んでいる。これらの特徴性から、本片は彦崎Z1式ではないかと思われる。また図掲はしていないが、小片の橙褐色をした薄手のものが他に1点（第2表）あり、これも恐らく文様ないものの、色調や薄手ということから同類のものと思われる。以上のことから縄文時代早期末のもの。また彦崎Z1式に想定される土器片から、縄文時代前期に位置付られるところの2期の複合する遺跡ではなかったかと想定されるのである。

つぎに石器類であるが、出土の10点中、そのほとんどが幅約2～3cmを測る小剣片系のものである。それらのものには片面を剥離した擦器系のもの、また雁形系の右燃りがあった（第3表）。この雁形状を呈した右燃り（第13図-1）は、形状から長脚燃りの系統を引くもののようにも考えられ、それは縄文時代早期と想定される位置付けを小片系の石器からも、その特徴を表出しているようにも思われるるのである。

（渡辺友千代）

（注1）同志社大学「出雲古文化調査団報告書」昭和34年

第5章 小 結

本遺跡は本報告したように、区名でいうA区（北側）辺りが本命地であったものと、既掘した平成5年度（詳細分布調査）の状況や今回の層序の成因関係から窺い知ることができる。したがって、偏端するB区においては極めて遺物は少なく、時期設定がやっとできる程度の出土状況であった。

その時期については、菱根式に酷似した特徴性を見出すことができるところから、縄文時代早期末に入々が住居していたものと想定される。また、これとは異なる小片の2点は彦崎Z1式と思われるものであることから、一方で縄文時代前期中葉以降の生活も存在していた可能性がある。この2期の隙間を埋める資料は今のところないことからみて、本遺跡は時期を異にする2期の複合遺跡であるということができよう。また遺構については、土坑25、ピット6が検出されているが、遺物が僅少ということをもあって、これらの遺構の全てについて2期のうちのどの時期に当たるものかは、同一層位内ということをもあって定かにできなかった。ただ中には具体的な炭化物、焼土などが検出されている土坑もあって、そこには生活誌の一端を見ることができないでもない。またSK14土坑などには、坑上部に立石、そしてその境界を意識したように置かれた数個の河原石は、ほとんどといつていいほど右が検出されなかつたⅣ層の状況では、その数個の配石状の石は気になる存在であった（今回は時間的な問題があって分析は行ってはいないが、土壤を採取しているので、いずれ担当機関に依頼しようと思っている）。

このように出土遺物からは、2期の生活痕跡が窺われるが、その僅少性、また層序的には同一層位内の検出をもあって、個々の具体的な生活誌は浮かび上がってはこなかった。それは本命地点と想定されるA区地点は、数次の横溢などで流失、破壊されたことにより、今回精査したB区はその偏端に当たっていたと想定される事状によるものであろうと考えられる。しかし地形的立地からみると、本位置周辺は匹見川本流が弧状に周流して段丘面を形成していることから、生活痕跡を遺した彼らにとって、そこは良地と映ったに違いないと思われるのである。

なお、最後に発掘調査したB区周辺は、盛土工法によって保存されていることを記して小結としておきたい。

（渡辺友千代）



1. 遺跡鳥瞰



2. 遺跡遠望(南西から)



1. 発掘風景(A調査区)



2. 発掘風景(B調査区)



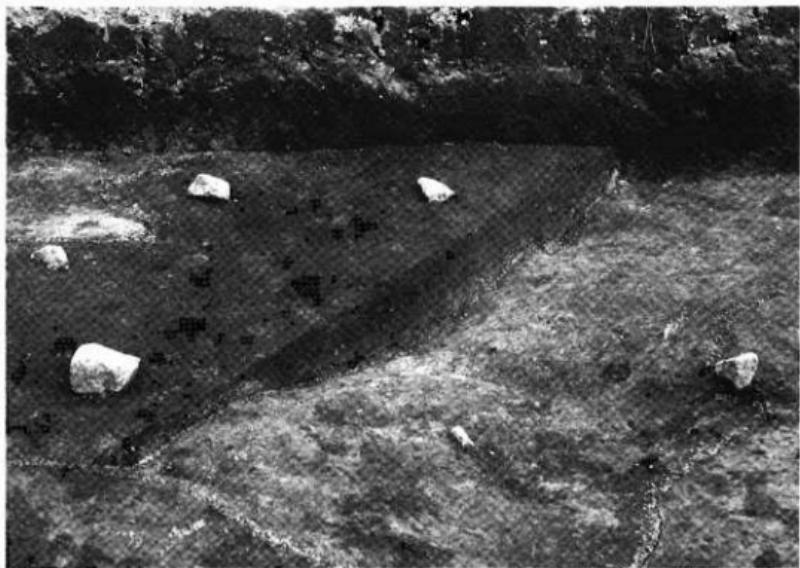
1. 石鎧出土状况



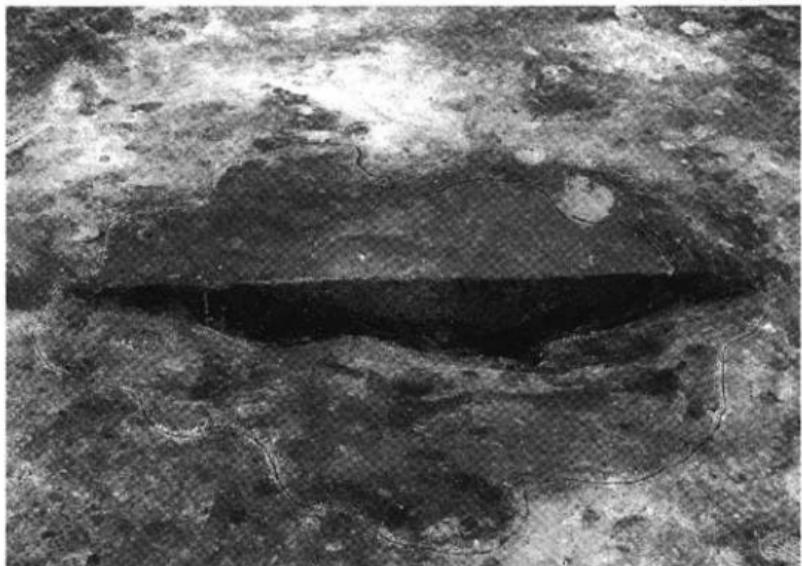
2. 土器片出土状况



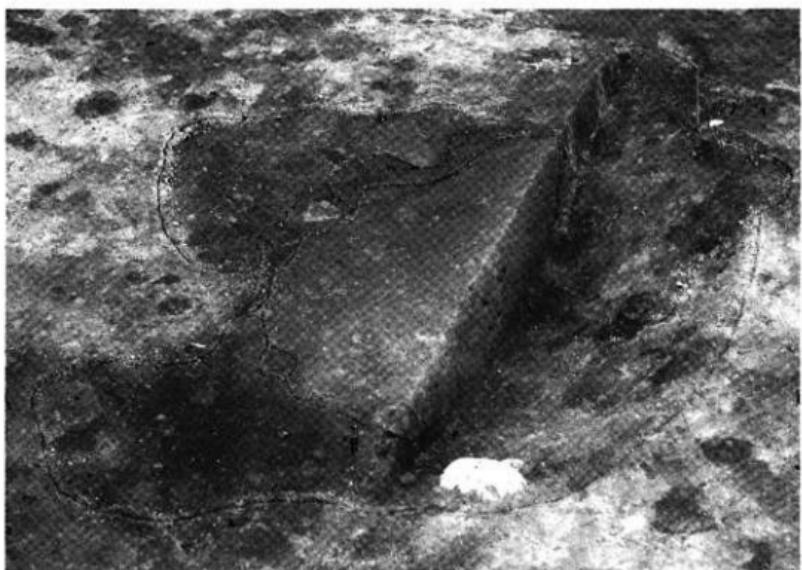
1. SK12 検出状況(西から)



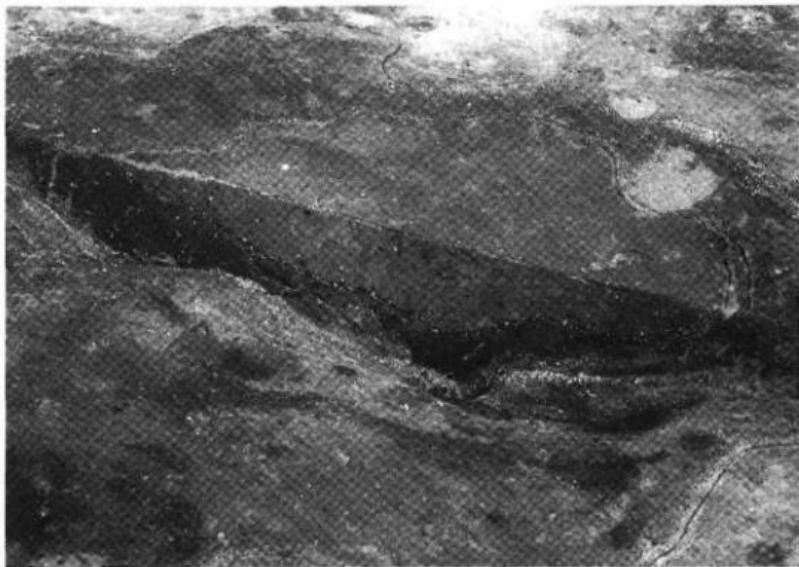
2. SK14 検出状況(西から)



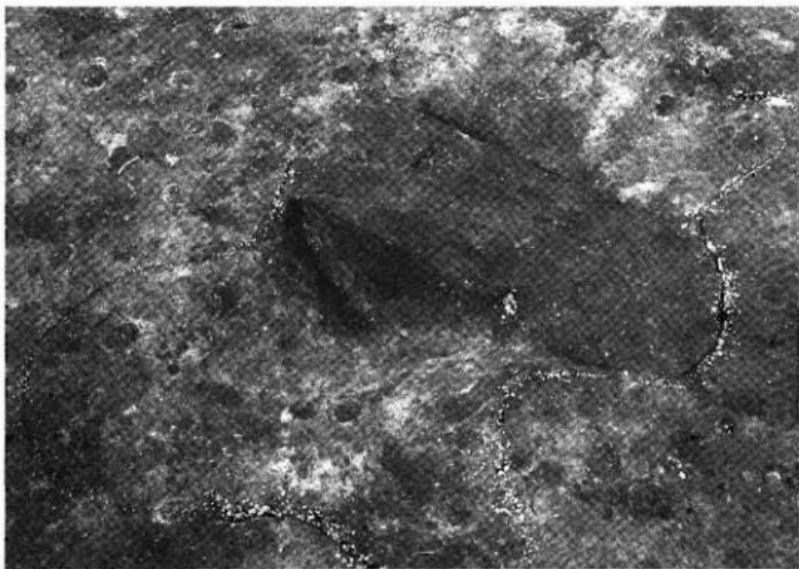
1. SK16 検出状況(西から)



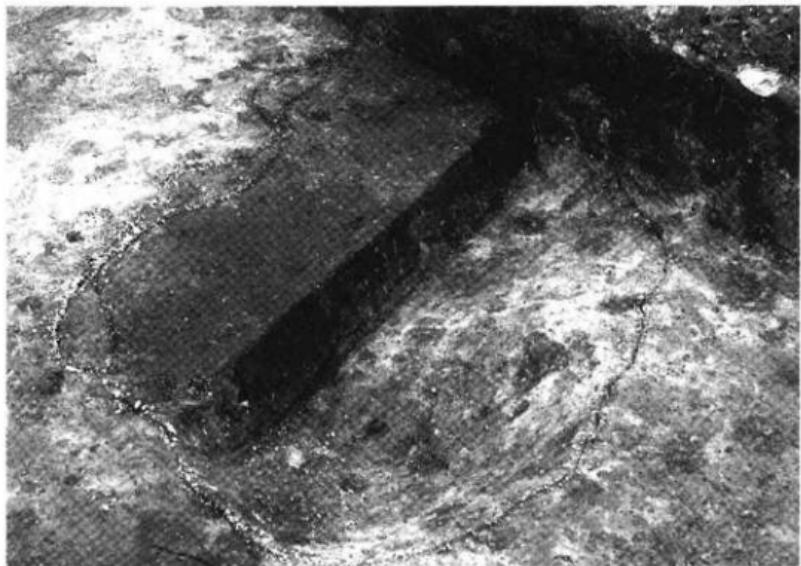
2. SK19 検出状況(北西から)



1. SK19 陷入状況(西から)



2. SK23 検出状況(北西から)



1. SK24 検出状況(北西から)



2. B調査区発掘状況(南から)

(外面)



12-1

(外面)



12-2

(外面)



12-3

(外面)



12-4

(外面)



12-5

(内面)



12-1

(内面)



12-2

(内面)



12-3

(内面)



12-5

1. 出土石器

(背面)



13-1

(背面)



13-2

(背面)



13-3

(背面)



13-4

(背面)



13-5

(腹面)



13-1

(腹面)



13-2

(腹面)



13-3

(腹面)



13-4

(腹面)



13-5

2. 出土石器

平成8年3月25日 印刷
平成8年3月29日 発行

ダヤ前遺跡

発行 四見町教育委員会
島根県美濃郡四見町イ1260
印刷 有限会社 谷口印刷
島根県松江市母衣町89
